

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2019 年 2 月 1 日 発行  
(通巻 480 号)

## 現代座レポート No. 77

- ・スクリーンで見る木村快作品 (1)
- ・『風は故郷へ』二つの舞台 上田幸夫 (2)
- ・誰でもできる朗読教室 (3)
- ・劇場と協同を考える 木村快 (4・5)
- ・府中市矢崎小学校 学芸会『武蔵野の歌が聞こえる』(6)
- ・チャリティライブのご報告 腹話術師いずみ (7)
- ・会館日誌 (7)
- ・お知らせ 会員入会、継続、寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987

### 歌声は響く 風は故郷へ 1988 年制作



1980 年代後半は国鉄解体で、戦後開拓地へつながる鉄道線路に夏草が生い繁り、農業構造改善事業は容赦なく開拓地を押し潰していた。弱い者は消えるという時代だったが、共に生きる歌声も聞こえはじめていた。

### 混迷の海を行く 出航 1981 年制作



経済成長まっしぐらだった日本が最初に受けた衝撃は漁業資源規制の二百海里問題だった。不漁のため廃船になる第 16 宝龍丸の乗組員達は陸（おか）の仕事を探すが、海で育った人間にとって陸の仕事は地獄の日々だった。時代からうち捨てられた人間にとつて、生きるとはどういうことなのか。宝龍丸の解散式で乗組員達は一転して「どうせ果てるなら、海で果てるよ」と再び混迷の海へ船出することを決意する。なぜか晴れ晴れとした出航だった。

### スクリーンで見る木村快作品 劇場の原点を振り返る

昨年 12 月 8 日（土）、現代座 3 階小ホールで、新しい企画「スクリーンで見る木村快の作品」の第 1 回『風は故郷へ』の上映会が開かれました。

はじめての企画で準備不足や反省点もありましたが、身近な会員の皆さんや木村快の作品に興味を持っておられる方などが集まってくれました。上映したのは 1990 年 7 月の東京朝日生命ホールでの公演でしたが、その時の公演実行委員長の上田幸夫先生も

駆けつけてくださいました次ページ。アンケートを紹介します。

「バブル景気のさなかに、よくぞこのような作品が生まれ、大勢の観客を動員したと思います。けっして自虐的な

意味では無く『都会から見放された人が協同する』という木村さんの言葉の重みを感じました」「言葉にならない程の感動でした。私の生涯の一部のようでした」「思いがけず大変素晴らしいものを見せていただきました。統一劇場、現代座の原点をはじめて目の当たりに見せていただくことができ感動しました」「30 年近く前の舞台をはじめて観ました。今の舞台にも通ずる

テーマが最初から描かれていて感激しました」

「武蔵野新田にも通ずる話ですね、大変すばらしかったです」

おかげさまで、「自分たちの集まりでもぜひ上映したい」との申し出もあり、木村作品には時代が刻み込まれており、現代を考える場としての活用も考えてはどうかとの意見も寄せられています。

◆次回は 5 月に『出航』を上映する予定です。

## 30年前の『風は故郷へ』をスクリーンで観劇 「じつ」の「舞台」



1990年『風は故郷へ』  
「東京の風」実行委員長  
上田 幸夫  
(うえだ・ゆきお)

日本体育大学教授。東洋大学助手の後、1990年4月より日本体育大学において、社会教育、公民館の研究を続けておられる。故郷は兵庫県豊岡市で、地域を視野に入れた教育の在り方に取り組んでいるとのこと。現在、日本公民館学会・会長。

昨年12月8日、現代座会館において、30年近い前の1990年7月18日から20日にかけての朝日生命ホール公演「風は故郷へ」を観劇することができました。当日の舞台最初から、最後まで約125分、30年の時を経て、はじめて、私はこの芝居の全体を味わうことができたのだと、今あらためて思い起こしています。というの、劇団の公演を成功させるため組織された実行委員会の実行委員長としてかかわっていた私は、じつところ、舞台をじっくり味わっていませんでした。スクリーンには、懐かしい熊倉さん、今村さん、愛田さんなどの姿が映し出され、30年の時間が経過している今なお、北海道をも含む日本の農家が抱え続けている課題のように思い、「新鮮だ」と思いつつ見えてきました。

と同時に、客席からの笑い声がじつによく伝わって

くるのです。こんなにも心に届き、楽しんでいただけたのかと、このスクリーンを見て、思わずにはいられません。このことはじつに貴重な発見でした。

それというの、実行委員会の私たちにとつては、なんとか客席を埋めなければならぬという真剣な思いから、チケットを購入していただいた人たちのなかには、多少とも義理や人情の心意気という方もいるでしょう。けれども、演じられている舞台は、そういう人をも巻き込んで、観客席と舞台とが一体となって繰り広げられた時を刻んでいるのではないかという思いになりました。30年の時を経て、そんな思いをするスクリーンでありました。

ところで、このスクリーンは、「風は故郷へ」の舞台そのものを「記録」することになったように思います。幕が上がって始まり、そしてフィナーレの舞台挨拶も映し出されてはいるものの、幕が下りて終わるスクリーンです。

じつは、上映会に足を運ぶ私は、ひよつとして私もどこかで映っているかな、という期待を持ったのでした。けれども、以上のようなスクリーンでしたので、私たち実行委員会の姿は、どこにも映し出されることはありませんでした。

朝日生命ホール、3日間を埋め尽くすため、3月初めから実行委員会が動き出し、最終日のお客さんにお礼を言いながら別れを告げ、会場のかたづけにかかり、打ち上げ会へすすみ、午前三時ちかくまで挿入歌「風は故郷へ」を大声で歌いあった実行委員会は、実行委員会という、もう一つの「舞台」を創り上げていたように思います。一つの目標に向かう私たちの「舞台」づくりがあったということなのです。

私たちは、統一劇場の舞台を観てもらうために奔走したけれども、私たちは統一劇場の舞台のためだけに奔走しているわけではなく、私たちの「舞台」づくり

への自覚がしだいに広がっていったのでした。

統一劇場、そして現代座は、そういう「舞台」を数多く創り出してきたのです。そのことは、70代以後の日本の各地域に、かけがえのない「財産」を創りあげてきたのであって、あらためて「舞台」を思い起こしながら、真剣に考えているところです。

「風は故郷へ」は1987年に北海道で取材。1988年から全国巡演を開始し、3年かけて全国で158回上演しました。

今回上映されたのは、統一劇場25年の歴史に区切りをつけ、新しく現代座としてスタートする公演でした。担当劇団員の木下の呼びかけに応えて、若い労働者達や医療関係者、青年海外協力隊のOBなど、はじめて顔を合わせる人達が集まって来てくれました。当時社会教育推進全国協議会の役員だった上田先生が実行委員長を引き受けてくださった事で、社会教育関係者も参加してくれ60人を越える若者達が高田馬場の古いマンションの12階の部屋に集まりました。

係ごとにニュースを出したり宣伝を確認したり、どうやって券を売るか話し合ったり。3日間で2000人の観客を集めるのは容易なことではありません。夜中まで会議が続く日もありました。

迎えた公演日、会場は満席。そして何より北海道の開拓地の農業の話なのに、客席の若者達は自分のことのように大声で笑い涙を流して共感してくれました。実行委員の一生懸命な気持ちが伝わったのだと思います。

今回30年ぶりに実行委員長だった上田先生に見ていただいて、私も改めて劇場の原点を振り返っています。

木下美智子

## NPO現代座 誰でもできる朗読教室

講師 長谷川葉月

昨年2018年11月28日(水)に「誰でもできる朗読教室」の第6期生発表会が現代座会館3階小ホールでありました。月2回の講座を6ヶ月間受講した生徒13人が発表しました。

今回は46名のお客様がご来場くださいました。発表



(後列左より)手塚修、今井治江、環笑子、木谷道宣、高嶋悦代、古明地節子、石川秀樹  
(前列左より)西山かず子、下向道江、木村サチ子、長谷川葉月(講師)、井上照美、藤巻愛

## 第6期生発表会 作品名・作者・朗読者

第1部	「蜜柑」	芥川龍之介	藤巻愛	★初参加
	「雪が降る」	都築直子	今井治江	
	「夫婦」	小池真理子	井上尚子	
	「ピアノ」	芥川龍之介	西山かず子	
	「程度の問題」	星新一	石川秀樹	
第2部	「熊人を助」『北越雪譜』より	鈴木牧之	木村サチ子	
	「仙人」	芥川龍之介	下向道江	
	「父の詫び状」	向田邦子	井上照美	★初参加
第3部	「超能力」	筒井康隆	手塚修	
	「柿」『永日小品』より	夏目漱石	古明地節子	
	「開いた窓」	サキ	環笑子	
	「紙吹雪」	宮部みゆき	高嶋悦代	
	「一身二生 吉宗の遺言」	太田俊明	木谷道宣	

会は13時30分に始まって16時40分終演という3時間を超える長丁場で入退場自由だったにも拘わらず、全部通して聞いてくださる方がいらしたのには驚きでした。

毎回生徒さんが新しい挑戦をしているのだから、私も新しい工夫をしよう、今回は司会をつとめることにしました。というのも、発表会を1部、2部、3部分けると、お客様は「経験の浅い人から朗読するんだろうな」と思われるかもしれないと考えて、各々が始める際に私が初参加の人をお知らせすることにしたのです。「でも全

こか余裕があつて、自らも朗読を楽しんでいる様子で頼もしい限りだったので、次回からは新しい方だけを紹介することにしようと思つて反省しました。

員紹介しないと不公平になるかしら」と思い直し、「○○さんは、第1期から続けて受講しています」などと紹介したら、後で生徒さんから意外な反応が。「先生、第1期から続けていて、こんなに下手なのかと思われたら恥ずかしいから、やめてくださいー！」

さて、朗読教室も4年目に入り、今年1月から始まった第7期では、新しい受講生を3名迎えて、昼クラス9名、夜クラス6名になりました。講座に関わってくださっているスタッフの方からの紹介だったり、生徒さんがお友達を誘ってくださったりしたのですが、とにかく新しい風を入れてもらえることは、私をはじめ継続受講の方にも有り難いことです。なにしろ、私が発声や朗読の基本原則について、いつもよりすごく丁寧な説明をするらしいのです。先日、「長く受講していますが、その原則は初めて聞きました！」で、私「え、そうでしたっけ!」「そうです、以前はきちんとした言葉にまとまっていなかったですから」と、見事に指摘されました。いやはや私も勉強になります。なぜ朗読を選んだのか理由を聞いてみると、「はつきりと言葉をしゃべりたいから」「声が出づらくなってきたから」「脳の活性化に良いと聞いたから」という答えが返ってきました。ですから、作品を読むだけでなく、体操や発声・発音練習の時間はこれからも大事にしていこうと思つていました。また、受講生のなかには「自分の声に自信がない」という方が少なからずいらつしやいます。ですが、人にはそれぞれ声に特徴があつて、自分の声にピッタリな作品を選んで朗読すると、グンとその魅力が増すのです。ある日突然、思いもよらなかった自身の魅力を探り当てる人もいます。とにかくたくさん作品を朗読して「自分の十八番」に巡り合つてほしいですし、私は、楽しんで朗読できる場を作っていこうと思つています。

## 劇場と協同を考える

木村 快

### 何か大事なものが消えていく

◆「失われた統一を求めて」

現代座会館で通信大学生支援の教室を開いている教育文化経営学院の高橋幸恵さんからの要望で、昨年12月から劇場論の勉強会を始めている。高橋さんは教育社会学の専門家で、かねてから劇場論に関心を持っていた。劇場論とは劇場の歴史を社会的に考察した理論である。

そこでぼくが若い頃影響を受けたユリウス・バープの『演劇社会学』（原題は『劇場の光で見る社会学』）を紹介した。ところが、高橋さんが大学図書館や主だった公立図書館を検索してみても全く見つからないという。

まさか……、これはちょっとシヨックだった。『演劇社会学』は決して読みやすい本ではないが、演劇論と言えば戯曲が中心だった時代に、初めて演劇全体の現象を原始人類の段階までさかのぼり、演劇は生活不安を克服するための社会的体験の場から誕生したものであり、近代演劇はその母体である観客を忘れ、



◆手元に残る貴重な1冊。

劇場本来の生命を失いつつあると警告した人物である。統一以来、「失われた統一を求めて」を合い言葉にしてきたのも『演劇社会学』に共鳴していたからだ。

彼はまた19世紀末から第一次大戦後にかけてドイツで発展した勤労者による観客組織運動、フォルクスビューネ（民衆舞台）の指導者でもあった。戦後の日本で誕生した労演（勤労者演劇鑑賞会）、労音（勤労者音楽鑑賞会）の運動はフォルクスビューネに学んだものである。

これは単に演劇の問題だけでなく、人間の生き方にとっても、何か大事なものが消えていくような気がする。いい機会なのでこれを考えてみる勉強会をはじめた。

◆協同とは何か

たまたま昨年暮れに開かれた葛谷栄一さん主催の「快塾」でも木村が劇場論の勉強会をやっていることが話題になり、劇場と協同の関係について話が弾んだ。快塾は協同組合関係者が集まる雑談会だが、農民の協同をテーマにした『武蔵野の歌が聞こえる』の上演を機に協同組合関係者が軸になって「川崎平右衛門研究会」が発足したこともあり、農業者の中に眠る協同性については関心が高い。ここでも協同と称する組織はいろいろあるが、協同の本質とは何か、広い視点で考えてみようということになった。

### 劇場を捨てた国

◆劇場のふしぎ

ぼくらの知っている観客は、劇場にやって来たときと帰る時とはまるで別人のように変化していた。入場するときとはごく普通の表情をした人々が、窮屈な劇場の中に座っていたはずなのに、舞台の幕が降り、劇場から出てくる時はまるで運動した後のように顔を紅潮させ、目をきらきらさせて大声で話し合っている。観客の身体は劇場の中で大きな変化を起こしているのだ。劇場での笑い、どよめき、拍手などは、観客の数

が増えれば増えるほど爆発的となり、日常生活では体験することのない強烈な体験となる。そこでは日常生活での自己認識とは全く別な、大きな群れに一体化しているようだ。

舞台上に集中した観客は、俳優の声や表情に対して反的に反応し、俳優もそれに反応して劇場全体が高まっていく。つまり劇場はコトバ以前のコミュニケーションで一種の陶酔状態になる。

◆劇場は協同の原点

劇場芸術は観客が俳優の肉声に集中したときにだけ成立する一回性の現象である。同じ作品でも地域が変われば全く別な反応になるし、観客の世代によっても、時代によっても別なものになる。

ここで言う「肉声」とは人が人に対して語りかける声の微妙な変化、身振り、手振り、顔の表情をともなつた全体で、お互いに顔の見える状態である。人は肉声に対して相互に反応し、周囲の人間を含めて肉声を共鳴させている。たとえばまだコトバを話さない赤ん坊でも、何らかの要求を持って泣くと、周囲の大人がやさしながら対応し、赤ん坊は大人の顔の表情や小さな声の響きを身体で納得し、安心する。つまり、コトバ以前のコミュニケーションを言う。

集団になると肉声は全体の共鳴をつくりだす。これが人間の協同を生み出す原点だとぼくは考えている。劇場は協同の原点なのである。

◆電子機器は劇場を駆逐する

ところが日本では肉声に対応した劇場がなくなってしまうた。ほとんどの公共ホールは多目的ホールとして、音の残響率の高い音楽演奏を基本にしており、肉声には対応していない。ホールの専門家を自任する技術者たちは、今では電子機器が進歩しており、人の声はコントロール出来るから演劇の上演は可能だと言っている。彼らにはどうも人間の肉声の意味が理解出来ないらしい。

い。

ぼくらの仕事では1960年代までに建てられた公会堂は、肉声に関しては問題なかった。地方にホールなどなかった時代は学校の体育館で上演したが、木造の建物は全く問題がなかった。ぼくの知る限り、今では東京都府中市の「府中の森芸術劇場」に、音楽ホールとは別の「ふるさとホール」があり、これがなんとか肉声劇場らしさを残しているくらいである。

◆肉声劇場の切り捨て

高度成長期以後、公共ホールは自治体のシンボルとなり、一斉に建て替えが始まった。建築物の見せかけやロビーの飾りに莫大な金をかけ、とにかく多数の観客を収容して、一方的に「見せる、聞かせる」大見世物小屋になってしまった。

肉声で一体感を成り立たせるにはたしかに限度があり、理想的には500人前後である。それでは経済的に成り立たないというので、儲からない肉声劇場は切り捨てたということになったようだ。

協同で生き残った人類

◆人類史を巡る

バープは劇場の始まりを原始人類の呪術信仰の舞踏集団にまでさかのぼっているが、原始人類とはどれくらい昔のことだろうと議論したものだった。

人類進化のプロセスについては、近年、人骨化石の科学的分析による大脳容積の変化や、DNA解析によってかなりのことが分かるようになってきている。

二足歩行をするヒト科の動物は350万年前にはアフリカ大陸で20前後のグループが存在していたようだ。現生人類の祖先であるホモ・サピエンスはその中でもきわめて弱小さなグループだったらしい。最初は森で暮らしていたようだ、アフリカ大陸の地殻変動で森林

地帯がなくなり、サバンナで暮らすようになった。

◆協食・協同保育・協同労働

一般に動物は自分で発見した食物をその場で食べる。だが、ホモ・サピエンスは肉食獣に囲まれながら生活するため安全な場所に隠れ住み、食物を手に入れるとそれを隠れ家に運んで、高齢者や幼児といっしょに食べるようになった。この「協食」の習慣によってホモ・サピエンスは生き延びることができたが、他の人類は滅亡してしまった。これは人類が農耕時代を迎えるまでの狩猟採集民時代まで続いた基本的な形だという。

人類がコトバを使うようになるのは7万年前と言われる。100人以上の集団生活による複雑な相互認識が脳の容積を拡大させ、その結果コトバが生まれ、協同行動をいっそう進化させたと言う。人類の脳は「協同脳」(社会脳)として進化したのである。

◆儀式の誕生

ヒトはコトバを組み立てることで、実在しないものを脳でイメージできるようになり、自然を支配する神の存在をイメージするようになる。そしてやがて狩猟採集から農耕時代へと進む。

農耕時代になると食料の保存ができて、生活も安定するようになり、広い地域でグループ同士のつながりが拡大していく。同時に貧富の差が生まれ、支配勢力が生まれる。協同性が失われ、群れによる争いが増えるようになる。また生産場所が固定されるため、作物が被害を受けると食糧危機に襲われる。

こうして自然の変化に対応できない農耕生活の不安を克服するため、食料の豊作、群れの安全を願って儀式が生まれる。儀式の日は集落全体が日常のいざこざから離れて、その日だけは身分の差別なく、共に歌い踊ることによって協同体験を復元する。バープはこの時点の儀式から説き起こしている。

悲劇の時代からのメッセージ

『演劇社会学』は昭和6年(1931)にドイツで出版され、日本では昭和9年(1934)に千賀彰の訳で大畑書店から発行されている。だが、この時代は悲劇的な時代でもあった。言論統制が強まる時代である。

ドイツではナチスが台頭し、フォルクスビューネはすでに弾圧されている。昭和8年(1933)には大学生たちがナチスの思想に合わない書物を焼き捨てる「焚書」が起こっている。バープの諸著作は焚書の対象となつたはずである。日本でも昭和9年に文部省が書籍の検閲を開始しているから、演劇者の間でも敬遠されたかもしれない。翌昭和10年には憲法学者・美濃部達吉の「天皇機関説」が発禁処分追い込まれ、話題になっている。これ以降はまっしぐらに戦争に向かつてはく進む。

バープはユダヤ系ドイツ人で、日本で『演劇社会学』が発刊された前年の昭和8年(1933)にアメリカへ亡命している。その後どのような晩年を送ったのかはさだかではない。

だが、「観客を忘れた演劇は必ず退廃し、消滅する」と警告したバープの言葉は、人間が孤立と混迷を深めつつある現代だからこそ、真摯に受け止めたと思う。



★なんとしても肉声の劇場を守りつづけたい。(現代座会館)

### 府中市・矢崎小学校 学芸会合唱ミュージカル 『武蔵野の歌が聞こえる』

ある日、府中市矢崎小学校の小池先生が現代座に訪ねて来られました。「4年生の授業で『川崎平右衛門』を勉強するので、できれば全員60人で学芸会で上演したいのです。いろいろ調べたら現代座で『武蔵野の歌が聞こえる』という芝居をやっていると分かったのですが、協力していただけませんか」



実は一昨年2017年は「川崎平右衛門生誕250年」にあたり、平右衛門の出身地府中市は定期的に記念事業として、現代座の『武蔵野の歌が聞こえる』を招聘し、3ステージ上演したところでした。そのうち1ステージは小学生用とし、全市の小学校に呼びかけたということなので、一同朝から準備して待っていたのですが、やってきたのはわずか57人で、そのうち半数は隣の小金井市からわざわざ

ざバスでやってきたのでした。

それでももう忘れかけていたところに、思いがけない小池先生の来訪でしたから、大あわてでスタツフと連絡を取って資料の収納場所をたしかめ、何とか無事に資料や台本や楽譜、構成図をお渡しすることが出来ました。

それを元に先生が台本を作り、できれば歌も入れたいと言っているので、私たちが使った合唱の楽譜とピアノの伴奏譜も送りました。

そして、できればゲストティーチャーで芝居を創るまでの話を子ども達にしてほしいということになり、芝居を創る時からいっしょに江戸史を学び、出演もした小金井市民の塚田善久さんと織壁哲夫さんをお願いしました。2人は快く引き受けてくれ、60人の生徒さんの前でお話をして、劇中歌も歌ってくれました。11月23日に行われた学芸会は大成功でした。

左右の合唱団には舞台で踊り、全員でストーリーを展開するすばらしい劇でした。



#### 小学校でゲストティーチャー

織壁哲夫

2018年11月13日、矢崎小では4年生が学芸会でこの劇を上演することになっており、ゲストティーチャーとして塚田、織壁の二人が訪れました。矢崎小の学芸会は11月22、23日なので、この日はそのための練習日です。

テーマは「川崎平右衛門・武蔵野の歌が聞こえる」です。

まずテレビ画面に私たちが上演したときの舞台の写真を映して、「背景が赤くなってね、なあーんだ？」

左・織壁哲夫さん 右・塚田善久さん



「ハイ！ハイ！富士山が噴火しています……」なかなかよく勉強している。

「そうだね！300年前に噴火したんだね。府中にも火山灰が積もったよ」

「さあ！私たち二人で、歌を歌います、『小金井橋へい

そげ』という歌ですよ！」

「いそげや、いそげ♪新田村の皆の衆！見捨てはせぬぞ♪御救い米を届けるぞ」とおじさん二人が声を張り上げる。子どもたちはポカンとしている。

「なんで御救い米を届けるのかな？」「……？」

「昔はお米がとれない年が続いて、食べるものに困ったのだよ、お米を分けてあげたんだ」

「平右衛門さんは、みんなを集めて、協力して作物が取れるように指導したえらい人だよ」

「ここ武蔵野の開発がいちだんらくして次に美濃へ行った。美濃ってわかるかな？」「……ハイ！岐阜県のことです」しっかりと子どもがいます。

「ここには大きな川が流れていて、いつも洪水を起こしていたんだ。なんと川かな？」「ハイ！木曾川です、担任の先生もびっくり！。こんな話をしながら楽しい時間をすごしたよ。」

# 西日本豪雨災害への チャリティーライブのご報告

## 腹話術師いずみ



2018年11月24日、西日本豪雨災害のためのチャリティーライブを行いました。その名も『西日本チャリティーライブ〜雨のちにじ@現代座』

昨年7月に起きた西日本の未曾有の豪雨災害。私の母と姉は岡山県総社市に住んでいます。この機会に、私は8月に倉敷市真備町で災害ボランティアに参加し、2階まで泥水に浸かった家を見てとても心が痛みました。自分に出来ることはないかと考え、私が住むこの小金井の町でチャリティーライブを開催しよう！と決意したのです。

現代座の俳優でヨガの先生の東志野香さんに「こんなライブをやりたいのだけど、どこかいい場所あるかしら？」となんとなく相談したところ、あれよあれよと会場が現代座に決定。本当にご厚意で貸していただけることになりました。

出演は3組。①【小金井在住のエンターテナー・マスタ―木村さん（歌とギター）】、②【NHK「あいのてさん」にも出演のビッキーこと尾引浩志さんと口琴の弟子・桃菜ちゃん（小6）の2人のコンビビッキー&ももな（口琴&倍音）】、そして③【腹話術師いずみ】。豪華な共演陣が応援してくれました。



現代座3Fは満員のお客様でした。笑いあり、ほろつと涙もあり。東京ではほとんど豪雨災害の報道がされなくなっています。小金井の皆さんの被災者の方々を想う優しさがたくさん伝わってきました。本当に開催して良かった、と心から思いました。

現代座3Fは満員のお客様でした。笑いあり、ほろつと涙もあり。東京ではほとんど豪雨災害の報道がされなくなっています。小金井の皆さんの被災者の方々を想う優しさがたくさん伝わってきました。本当に開催して良かった、と心から思いました。

収益の34,250円は、岡山県倉敷市真備町の復興のために、倉敷市災害ボランティアセンターへ寄付いたしました。現代座の皆様、共演者、そしてお客様に心から感謝いたします。

### 現代座会館 11月〜1月 活動日誌

- 11月16日 「現代座レポート76号」 発送作業
- 18日 台本を読む会・第2回「もくれんのうた」
- 12月9日 教育文化経営学院高橋先生と「劇場講座」開始
- 15日 木谷氏とワーカーズ三多摩役員来訪
- 16日 台本を読む会・第3回「わすれものではありませんか？」
- 16日 現代座忘年会
- 17日 森武磨氏、名村優子氏ブラジル資料整理に来訪
- 19日 蔦谷栄一氏「快塾」開催
- 20日 「平右衛門研究会」事務局会議に木村快参加
- 1月7日 「平右衛門研究会」打ち合わせ
- 毎月第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

#### 【現代座ホール】

- 11月10、11日 劇団マイスター「ブラッディ・マリ」公演
- 15日 劇団希望舞台「釈迦内極唄」稽古
- 1月20日 「保育ドリム」練習
- 1月30〜2月4日 歌をあなたに「その先はパラダイス？」公演

#### 【三階小ホール】

- 24日 西日本チャリティーライブよこがねい「雨のちにじ@現代座」
- 12月8日 スクリーンで見る木村快の作品 第1回「風は故郷へ」
- 1月13日 津田リトルコンサート
- 隔水曜日 朗読教室
- 毎火曜・木曜日 ヨガ教室

#### 【定期使用 二階サロン】

- 毎日曜日 教育文化経営学院（学生支援）
- 毎水曜日 熟年パソコンサークル
- 隔木曜日 じょろ熟年講座

## 新しい生き方の創造を描く記録映画

## 『ワーカーズ・被災地に起つ』

現代座会館視聴室で記録映画『ワーカーズ・被災地に起つ』の試写会が開かれました。東北被災地の大槌町、陸前高田市、気仙沼市、登米市、石巻市、巨理町などで活動する姿が紹介されています。この映画の最大の特徴は「ワーカーズ・コープ」という新しい生き方が描かれていることです。

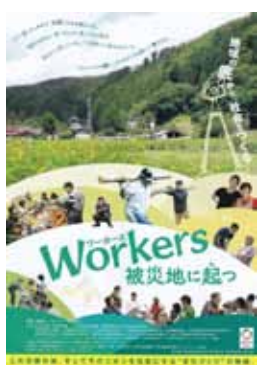
「ワーカーズ・コープ」とは、地域が必要とする保育、介護、就職支援などの事業を「みんなで出資して、みんなで働き、みんなで経営する」新しい型の協同組合です。

困っている人々を支援するのではなく、自ら困っている人たちの仲間になり、高齢者や障害者と共に生きるのです。これは全く新しい型の「まちおこし」事業と言っていいでしょう。

たとえば「困っている人を守る施設を作りたい」と訴えてもなかなか認可が下りない。行政や営利企業に期待できないのなら、自分たちで作るしかない。そこで被災地の仲間と相談しながら、次々と自分たちで施設を立ち上げるのです。

この新しい型の協同組合はヨーロッパではすでに定着しており、日本でも現在国会で法制化の準備が進められています。

各地で順次公開されるので、ぜひ多くの人に観てもらいたいと思います。



## ◆岡田京子さん元気です

久々に岡田京子さんが訪ねて来てくれた。ある合唱団から旧満州引揚者の短歌への作曲を頼まれ、色々資料を読んでいるが、自分たちの育った満州とは一体何だったのだろうかと考えてしまうという。

岡田さんはお父さんが軍医だったため、昭和14年に満州西端の街ハイルルの小学校に入学している。戦前生まれの人なら知っているノモンハン国境戦争のあった地帯である。昭和17年には東側のソ満国境、牡丹江省ムーリンの学校へ転校したが、多くの青年たちが開拓地へ送られて行ったという。



岡田さんとはもう60年も一緒に仕事をしているが、これまで自分たちのことを語り合う機会はなかった。ぼくも植民地生まれなので、人生の最後に植民地で育った世代の物語でも作ろうかと話しあった。(木村)

BONBON 組公演  
「HOTEL OEDO」

江戸をテーマにしたホテルに宿泊し、電子機器を奪われたお客様たちのコメディ

日時：5月24日(金) 14:00 / 19:30

25日(土) 14:00 / 18:30

26日(日) 14:00

(開演時間は変更の可能性があります)

場所：現代座会館3階小ホール

料金：2500円

問合せ：info\_bonbon@yahoo.co.jp

現代座メンバー 矢川千尋が出演します

## NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

## ★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円(1口以上)

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座